REPORT 4

みんなのダンスフィールド インクルーシブな身体表現活動の普及事業のそれから

（障害者スポーツ支援基金　地方分　平成17年度）

DATA
〒226-0015　神奈川県横浜市緑区三保町32　東洋英和女学院大学内
TEL　045-922-7270
http://homepage3.nifty.com/inclusive-dance/

WAM基金では、障害者スポーツ支援基金として、障害者の社会参加の推進等に資するため、民間の創意工夫を活かした自発的な事業等に対して助成を続けてきました。

1998（平成10）年に開催された冬季長野パラリンピックをきっかけとして、平成10年度に障害者スポーツ支援基金が創設され、障害者スポーツの振興が図られて現在に至ります。この分野では「みんなのダンスフィールド」を取り上げます。助成事業名にあるインクルーシブというのは「すべてを含んだ、包括的な」といった意味。取材時も包み込まれるように、活動の和に自然と入れていただきました。

2007年夏号（第38号）のチャレンジレポートでは、障害のあるなしにかかわらず、ダンスを通して表現する「みんなのダンスフィールド」のインクルーシブな身体表現活動について掲載しました。3年余を経過した現在、その活動はどのようなひろがりを見せているのでしょうか。今回は、メンバーのコメントを取り上げながら、「つながり」を感じることができる「みんなのダンスフィールド」の取り組みをお伝えいたします。

1 WAM基金による助成事業とその後

「みんなのダンスフィールド」は1998（平成10）年に誕生した「スタート」というグループがはじまりです。6人の子どもたちがお互いの違いに戸惑いながらも、その違いに共鳴し、自由に身体表現をすることの楽しさを見い出していきます。その後もいくつかのグループが誕生し、2002（平成14）年すべての活動を統一し、名称を「みんなのダンスフィールド」としました。障害者スポーツ支援基金の助成を受けて事業を行ったのは平成17年度。障害の有無や性別、年齢等に関わらず、インクルーシブな身体表現活動の普及を図ることを目的に、ワークショップの開催や、活動の様子を記録した3種類のDVDを作成しました。また、障害児・者の参加および鑑賞に重点を置いたパフォーマンスも開催しています。

「私たちのような団体では、活動資金の確保が難しい面もありますが、この助成事業は、インクルーシブな活動を地域社会で築いていく、そしてより多くの地域へと普及していくきっかけとなりました」と代表の西洋子さんは当時のことを振り返ってくれました。その後、ワークショップ等の活動もますます活発になるなど、事業は確実にひろがる一方、現在も前回掲載時と同じく、東京都新宿区にある全国障害者総合福祉センター「戸山サンライズ」の体育館で活動を続けています。基本的には毎月第2・4日曜日の活動になりますが、「パフォーマンスやワークショップなどのイベントの近くになると、毎週活動することもあります」と西さんは説明してくれました。ただ、毎週の活動になっても、基本的にメンバーには参加を強制することはありません。あくまでも自主性に任せながらの活動であり、メンバーによっては日曜日以外の日でも互いに時間をつくって、作品を深めるために話し合いの時間をもつこともあるようです。

以前から「雰囲気づくり」に気を配られている西さん。活動時間中は、メンバーの自主性を第一に考え、あくまでも自然な形での身体表現を心掛けているといいます。そのため、常に手をとり足をとり指導しているわけではありません。全体を見渡し、必要な時にだけ声をかけ、触れ合いながら指導しています。合間にはメンバーからの相談事にも親身になって応じるなど、皆が気持ち良く活動できるよう、この体育館全体を細やかにコーディネートされていました。

2 メンバーの成長を促すための取り組み

取材時はメンバーやその家族を含めて40名ほどの方々が活動に参加されていました。

平成21年度はメンバーを3グループに分け、そのグ

【通常の活動風景】

（全国障害者総合福祉センター「戸山サンライズ」にて）

保護者の方のダンスの１コマ

これは何でしょう。「ヘビ」でした

思い思いに表現しています

ループごとに自分たちの地域の中でのワークショップを企画・運営する試みを進めています。戸山サンライズは新宿区にありますが、「みんなのダンスフィールド」の活動をより多くの方々に知っていただくために「中野」「杉並」「練馬」の3つのグループをつくり、各区で独自の活動ができるように行政機関などにワークショップのアイデアを提案し実行に移そうとしています。活動時では、各グループの進行状況の報告もされました。

こうしたワークショップの企画運営や、進行状況の報告はメンバーが行います。状況は3グループともにそれぞれですが、幼稚園や保育所で発表会を提案したり、区役所のスペースにパンフレットを置かせてもらう交渉をしたりと、メンバーが主体的に発案して行動に移しているところがすばらしく感じられました。

なお、報告時には1人だけでなく複数で行ったり、小・中学生のメンバーが報告する際にはご家族や保護者の方が補足したりするなど、みんなで共有できるように工夫されていました。このように細かいところでも、円滑に運営していくためのエッセンスが組み込まれています。

3 自分たちでやり抜くことの意義

さて、何人かのメンバーからコメントをいただいています。はじめに当初からのメンバーの夏希さんです。電動車いすを自在に操作しています。この日は最初の30分ほど参加され、ガイドヘルプ事業所に出かけて行きました。

「中学校から高校まで養護学校（当時）に通っていたので、はじめのうちはここに参加するのがとても楽しかったです。今日は仕事で踊る時間が短くて残念です。月に3回でも4回でも活動があればうれしくて来てしまいます」。

◆　◆　◆　◆　◆

次は、「中野」グループ担当の麻衣子さんです。麻衣子さんも「みんなのダンスフィールド」にかかわりはじめてから10年というベテランですがまだ10代。若さやエネルギーに溢れています。

「区内3か所くらいにダンスのワークショップを実施したいと交渉しました。自分が卒園した幼稚園にお願いしたのですが、良い経験になると思ってやってきました。準備からすべてを自分たちでやってみると、参加者をどう集めたらよいのか、また会場の広さやスロープの設置などバリアフリー関係にも気を遣わないといけないですから大変ですね」と言うものの、その表情はとても充実していました。

◆　◆　◆　◆　◆

最後に、芳史さんからもお話を聞きました。現在はコーディネーターも務める23歳。車いすでサッカー観戦に行ったり、ギター演奏が趣味とのことで、「何事にも積極的に」がモットーの活発な方です。

「月に2回だけだと、とても久しぶりに感じることもあります。でも、パフォーマンスが近づくといつもより多く練習をしないといけないので、毎週活動ができる時期はとてもいいと思います。あと、活動中は何もかもが自然な感じなので、みんな無理にやっているということはないですよ」と説明してくれました。取

材日は同年代の男性が少なかったのですが、「昔からやっているけれど、老若男女を気にすることはあまりありません。上下関係もないし、そこもとてもよいところですかね」。

◆◆◆◆◆

メンバーそれぞれに強い想いがあります。その想いが継続しての活動へとつながっています。

4 本当のインクルージョンとは

ここで行われているダンスには、リズミカルなものから幻想的なものまで、かなり多くの「引き出し」があります。取材日もアニメのテーマ曲や外国の女性歌手の壮大な歌声にあわせて、思い思いに表現していました。ずっと見学していると、実際の舞台のパフォーマンスを鑑賞したくなってきます。

昨年11月には東京都教育委員会主催の「夢に向かって共に進もう」に参加、今年の3月には国立民族学博物館主催の「影で出会う 影でつながる」に参加します。外部の機関とも積極的に連携し、社会に向けて活動を発信する試みを重ねてきました。また、「みんなのダンスフィールド」が主催してきたライブパフォーマンスでの舞台発表は昨年9月で9回を数えます。

西さんは次のように振り返ります。

「最初のうちは、健常者と障害者で分かれてしまったこともありましたが、みんなで表現を創り合っていくうちに馴染んでいきました。特に誰が中心というわけでもないのですが、お互いの個性に気づきながら、一緒だからこそ生まれる表現を大切に、メンバー同士が自然にかかわることを心がけて、ファシリテートしています」。

【みんなのダンスフィールド 第9回ライブパフォーマンスより】

（2009（平成21）年9月20日：練馬区立練馬文化センター大ホール）

くじらとくらげの物語

I'm here with you

共創（つながり）

また、最初のころは保護者の方も見ているだけのことが多かったそうですが、そうすると子どもたちが自分の送り迎えだけで時間を使ってしまう、と逆に負い目を感じてしまうこともあったそうです。次第に保護者の方も自然とダンスに加わるようになり、今では保護者だけのグループも活発に活動しています。

それぞれが創りだすダンスの作品にはシナリオがあるのですが、これはメンバーで議論しながらイメージを共有し、何度か試行錯誤を繰り返しながら具現化していきます。メンバーは基本的に自由参加ですから、もし誰かが欠けたとしても影響のないように、その場で生まれる表現を大切にしています。パフォーマンス中、シナリオのとおりに進まなくても西さんは指摘したりしません。「みんなそれぞれですから、一律にそろえさせるよりも、ありのままを表現し、見る人に私たちの存在やつながりを伝えていければと考えています」とも。最近、パフォーマンスについて問い合わせが増え、特別支援学校の教師らの教育関係者や、ダンスの専門家からの見学依頼も多くなっています。

前回掲載時に「後継者育成が課題」と話されていた西さん。そのことに触れてみると、「団体発足当時は幼稚園生だった子が大学生になって、今では積極的にコーディネート役を務めるなど徐々にその芽が育ってきました」と嬉しそうに話してくれました。発足から12年目を迎える「みんなのダンスフィールド」、今後の活動がますます楽しみです。